3　2版　（第3種郵便物認可）　公　明　新　聞　2022年（令和4年）5月18日（水曜日）

訪日客受け入れ再開へ

国交相 月内に少人数で実証事業

斉藤鉄夫国土交通相（公明党）は17日の閣議後記者会見で、新型コロナウイルスの水際対策のため認めていない外国人観光客の受け入れ再開に向け、5月中に実証事業を実施すると発表した。日本の旅行会社が行動管理する少人数のパッケージツアー形式とする。6月上旬に行う方向で検討していたが、前倒しすることにした。

観光庁によると、米国、オーストラリア、タイ、シンガポールの4カ国からの観光客が対象。ワクチン3回接種を終えていることを参加の条件とする。緊急事態宣言など発令されておらず、都道府県が受け入れに同意した地域のみで行う方針。旅行会社の添乗員が同行する。

実証事業は団体ツアーの感染対策の実効性を検証するのが狙い。観光客の消毒などの徹底を求める。観光客の行動を適切に管理し、感染者が出た場合に円滑に対応できるかも確かめる。

水際対策の緩和求める

有識者会議 自治体の代表から聴取

政府の新型コロナウイルス対策を検証する有識者会議は17日、経済団体や地方自治体の代表からヒアリングを行った。飲食店の営業時間短縮などを中心とした行動制限への異論が相次いだほか、水際対策の緩和を求める意見も出た。

日本商工会議所は緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の影響で飲食・宿泊業が大きな打撃を受けており、今後は規制を最小限にすべきだと主張した。

全国知事会は、クラスター（感染者集団）の発生場所で飲食店が占める比率が低下しているとして、飲食店に偏らない対策を地域が選択できるようにすべきだとの意見が大半だったとする結果を示した。

量で現場が処理しきれず、内容も分かりにくいとの指摘も出た。

水際対策を巡っては、経団連が空港での検査廃止と入国者数の上限撤廃を早期に実現するよう主張した。

全国保健所長会は、都道府県保健所長会へのアンケートで、新型コロナの感染症法上の分類を季節性インフルエンザ並みの「5類」相当に変更すべきだとする意見が大半だったとする結果を示した。

「勤労者皆保険」実現を

政府本部 全世代社会保障で中間整理

政府は17日、全世代型社会保障構築本部（本部長＝岸田文雄首相）の第2回会合を首相官邸で開き、制度改革に関する中間整理をまとめた。政権が掲げる「人への投資」を強化するため、厚生年金などの加入者を拡大する「勤労者皆保険」の実現や子育て支援策の拡充をめざす。

岸田首相は席上、「持続可能な社会保障制度を将来世代に伝えていくためには、社会保障の担い手を確保するとともに、男女が希望通りに働ける社会をつくる未来への投資が重要だ」と強調した。政府は6月ごろに策定する「骨太の方針」に改革項目を盛り込んだ上で、具体化に向けた議論を本格化させる。

中間整理は持続可能な社会保障制度をつくるため、子育て・若者世代への支援や多様な働き方に対応した制度設計を柱に掲げる。厚生年金の適用対象を働く人全てに拡大する「勤労者皆保険」を実現し、雇用形態にとらわれない社会保険制度を構築。子育て支援策として育児休業制度の見直しを提案し、女性の就労を制約する制度の改善や介護離職を防ぐ方策の検討も打ち出す。

このほか、家族の介護や世話を担う「ヤングケアラー」の支援強化や、高齢者の住まい確保などを盛り込む。

オンラインで日本語指導

文化庁など ウクライナ避難民向け

文化庁と出入国在留管理庁は17日、ロシアの侵略から逃れて来日したウクライナ避難民に対し、オンラインを通じ無料で日本語を教える事業を始めた。各地で日本語学校の学級が受け入れ態勢を整え、この日は東京都新宿区の学校で初の講座を開設。簡単な日常会話を中心に学ぶ。

文化庁によると、国内の避難民は今月15日時点で984人。同庁は避難生活が終了後、報道各社の取材に応じ、「楽しかった」「日本文化も面白い」などと話した。

指導の機会を設けた。17日開設した新宿区の日本語学校では避難民4人を受け入れ、うち神奈川県に在留する20代女性1人が出席。ロシア語通訳を交え、時間帯に応じた日本語でのあいさつの仕方や12カ月の呼び方、指示語などを習った。女性は授業が終わっても勉強を続けたい」と話した。

視覚障がい者向け機関誌

点字こうめい

84号 発売中

公明党の視覚障がい者向け機関誌「点字こうめい」第84号が発売中です。同誌は毎回、視覚障がいに関連した多彩な話題を掲載。ここでは第84号の内容をダイジェストで紹介します。記事の全文は、公明新聞電子版または「公明出版サービス」のサイトで読むことができます。

「点字こうめい」のご購入は公明出版サービス（☎0120・959・947、平日9時～17時）まで。ご意見、ご感想をお寄せください。tenji@komei.jp

公明新聞電子版のサイトはこちら

第1回大会から約40年

ブラインドマラソンの魅力

特集

「特集」では、視覚障がいがある人も、ない人も、走る喜びを分かち合える「ブラインドマラソン」の魅力に迫りました。

ブラインドマラソンは視覚障がいの度合いによって、単独走か、晴眼の伴走者と一緒に走るかに部門が分かれます。ランナーと伴走者は「絆」と呼ばれる1本のガイドロープを互いに握り、声を掛け合って並走。一心同体で走り出せば、たちまち爽快感や達成感が得られるといいます。

軽快にランニングする高橋さん㊧と伴走者の村上さん＝3月　東京・北区

国内におけるルーツは1983年、大阪府で開催された「第1回全日本盲人健康マラソン大会」です。世界初の、視覚障がい者だけの大会でした。この大会を境に「視覚障がいがあってもマラソンを走れる」との機運が高まっていき、世界トップレベルの日本人選手も次々と誕生するようになりました。

2004年のアテネパラリンピック男子マラソンで金メダルを獲得した高橋勇市さん(56)も、その一人です。今回の特集では、今も現役で活躍する高橋さんと、伴走者の村上和章さん(58)のトレーニング風景を取材。2人が、それぞれの視点からブラインドマラソンの魅力を語ります。

例えば、高橋さんは自身の体験を踏まえ、「心も体も健康になれる最高の方法ですし、かけがえのない仲間が増えることも間違いなしです」と力説。また、視覚障がい者のランナーに対して伴走者の数が少ない現状を指摘していました。

国内で競技の普及に取り組む「日本ブラインドマラソン協会」は、伴走ボランティアの「裾野」を広げようと、各地で愛好家団体などが実施している「練習会」の情報を協会ホームページから発信しています。

人間登場

盲導犬と共に舞台で勇気届ける

NPO法人・劇団はーとふるはんど 櫻井 洋子さん

全盲や弱視の人の活躍を紹介する「人間登場」では、手話を共通語とした芝居やダンスを上演するNPO法人「劇団はーとふるはんど」の団員で、盲導犬と共に舞台に立つ櫻井洋子さんの挑戦を追いました。

34歳の時、視力と聴力が低下する難病「アッシャー症候群」との診断を受けた櫻井さん。駅のホームから転落して大けがを負い、恐怖から家に引きこもった経験もあります。失意の底から救ってくれたのは、周囲の人の励ましと、人生のパートナーである盲導犬でした。

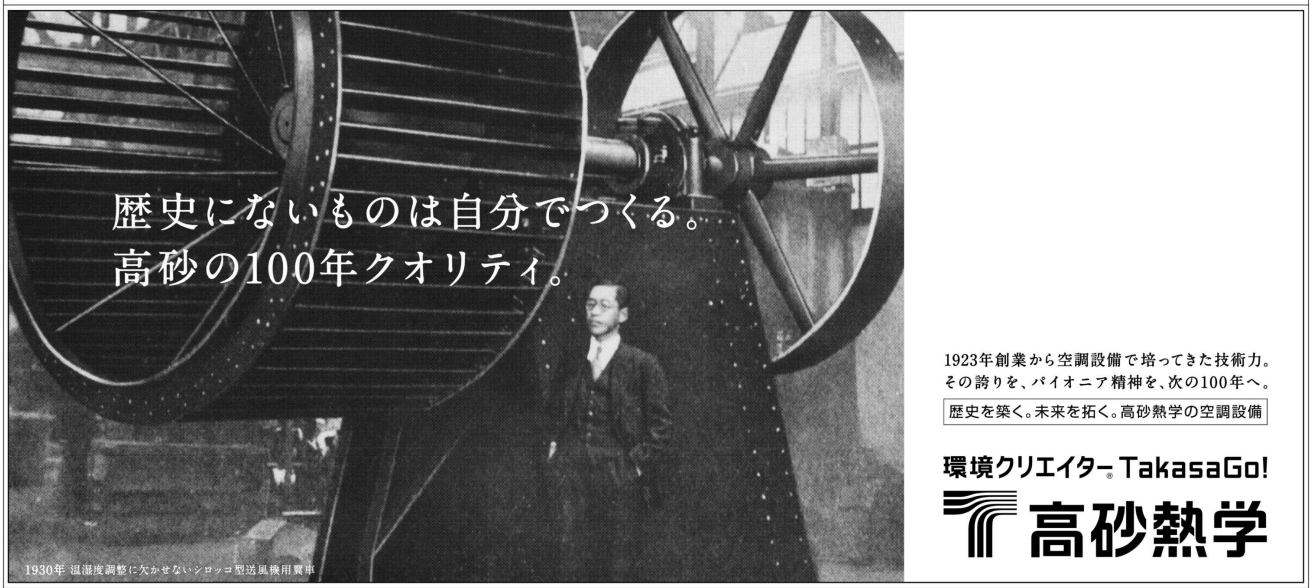
2016年の春、補聴器を使って鑑賞した「はーとふるはんど」の舞台に胸を打たれ、その日のうちに入団を願い出ました。以来、65歳になった今も、舞台を通して、困難と向き合い挑戦する勇気を多くの人に届けています。

「何事も挑戦するのみ。挑戦しない失敗よりも、挑戦して失敗した方が爽やかな気持ちになれる」。櫻井さんはパートナーのトリトンをなでながら、笑顔で語ります【写真】。

「特別寄稿」「話題」も充実

著名人がメッセージを寄せる「特別寄稿」では、社会福祉法人・日本点字図書館の長岡英司理事長が、「情報環境も読書環境も様変わり」と題するエッセーを寄せました。テクノロジーの進歩で目覚ましく向上した視覚障がい者の読書環境の変遷をたどりつつ、今なお点字図書や録音図書の製作を人の手で支えるボランティアの重要性を訴えます。

「話題」のコーナーでは、誰もが映画を楽しめる国内唯一のユニバーサルシアターとして注目され、先ごろ開館5周年を迎えた「シネマ・チュプキ・タバタ」（東京都北区）を紹介。また「公明党フラッシュ」では、新型コロナ対策に取り組む党の最近の成果をまとめました。



©公明新聞